

光葉同窓会メールマガジン

<2026年4月号>

226号 2026.04.01 配信

新年度が始まる4月。春のやわらかな風とともに、「新しいスタート」を迎えられる方も多いのではないのでしょうか。環境が変わるこの季節は、不安と期待が入り混じる時期です。このメルマガでは、卒業生の皆様の前向きな一歩を後押しできるような情報やヒントもお届けしたいと考えています。ご活用いただければ幸いです。(常任委員 高味 み鈴)



■同窓会だより

◇光葉同窓会入会式開催

3月11日(水)、人見記念講堂において、令和7年度学位記並びに卒業証書授与式が午前と午後に分けて挙行されました。卒業生代表として歯科医師としてご活躍の須田祐子さん(2003年英米文学科卒)が祝辞を述べました。

続いて同窓会入会式も行われ、新幹事を紹介しました。卒業のお祝いと入会の記念として、同窓会から光葉同窓会のシンボルマーク入りのミニハンカチタオルを贈りました。全国の支部から届いた祝電は、卒業式当日に人見記念講堂ロビーに掲示させていただきました。

◇光葉同窓会報第106号が発行

今回号より、会報がカラー印刷で発行され、支部会の写真も掲載しています。



◇第53回光葉同窓会総会・懇親会のご案内

日時：2026年5月17日(日) 11時～14時

会場：学園本部館3階 大会議室

※出席される方は、会報第106号に同封の払込取扱票で、
会費3,500円を4月20日(月)までにお振込みください。



■学園の花

【鬱^{うこん}金桜】



学園内にはたくさんの桜が植えられていますが、「グリーンホール」と「人見記念講堂」の間に植えられているのが鬱金桜です。数多い桜の中で、唯一、薄黄緑色の八重咲の花を咲かせます。咲き始めは薄黄緑色ですが、時間が経つにつれて白っぽくなり、最終的には中心部がピンク色を帯びます。色の変化もこの桜の特徴です。カレーに使用される香辛料で知られるウコンに似た色から、名付けられました。

開花は4月中旬から5月上旬です。

■ 広げよう光の葉



神奈川県支部会副支部長

片山 典子さん (旧姓 高橋)

1986年 食物学科卒

「定年を迎えて思うこと」

短大を卒業してから就職した会社で、2025年9月無事定年を迎えることができました。20歳で働き始めたときは自分が60歳になることや、こんなに長く仕事を続けるとは全く想像もしていませんでした。現在も同じ職場で継続して働いていますが、仕事で一区切りがついた今、働いて感じたことやこれからのことを考えてみました。



私が働き始めた1986年当時は「女はお茶くみ」的な社会風潮がまだまだあり、男性社員の補助的な仕事や「これは女子がやる仕事」と区別されたりしていました。一方で、男女雇用機会均等法の施行で女性の意識が変わり始めた頃でもありました。入社した頃は、親も友だちも「結婚したら辞める」が当たり前の考えで、自分もそんなつもりでいました。でも何時の頃からか「結婚しても辞めない、子どもが生まれる前まで働く」「生まれても働き続ける」と、周りの先輩たちの考え方や生活スタイルがどんどん変わっていきました。

私が仕事を辞めないで続けてこられたのは、家族をはじめ周りの人たちの協力はもちろんですが、結婚や妊娠のタイミングが時代の流れに乗れたこともあるのかなと思っています。仕事と子育ての両立は、想像以上に時間に追われて大変でしたが、段取りや根回しをすることの大切さを学びました。キャリアを重ねることで仕事の達成感も感じられ、「ママ」と「会社」の二つの世界で必要とされ、充実した日々を過ごせました。

企業の体制も時代と共に変化し、コロナ明けにあった人員整理のあとは少人数運営が加速し、以前とは違う役割や多能工的な働きを求められるようになりました。役職は変わらなくても業務が増えていったのです。負担が多い仕事の中での新たな発見は、「自分には自分にも気が付かなかった才能がある」ということです。「性別」や「学歴」でこれまで自分には回ってこなかった仕事でも、案外うまくいくことに大変驚き、「自分の可能性はまだまだあるんだ!」とも感じました。もっと早く挑戦できていたら、会社での自分の立場も変わっていたかも知れず、「もったいなかったなあ〜」と思ったりしています。

人生100年時代、やりたいことが何でもできる時代だからこそ、みなさまにはいくつになっても色々なことに積極的に挑戦し、意に沿わないことでもまずは試してみることをお勧めします。自分では気がついていない「才能」や「できること」がまだまだ眠っているかもしれません。私はいま、週5フル勤務が少し解消しました。時間に余裕ができたならやりたいことの候補を、あれこれ考えてワクワクしているところです。これからも好奇心とチャレンジ精神を持ち続け、色々なことに挑戦し、楽しみながら生き生きと暮らしていけたらなあと思っています。【End】